

式辞

令和2年1月の3学期始業式で、干支「庚子（かのえね）」は「あらためる」「新しい生命のきざし」といった意味があると紹介し、日々 Challenge する1年にしましょう、と話しました。

そんな令和2年は、新型コロナウイルスで大きく混乱した1年となりました。制約の多い生活を送る中で、これまで当たり前と思っていたことの素晴らしさを再認識したこと、あるいは何となくこれまで通りやっていたことを見直す機会としたこと、皆さんそれぞれが経験したと思います。

12月になりワクチンや治療薬開発のニュースが流れてくるようになりました。令和3年は辛丑（かのとうし）ですが、「新しい生命のきざし」が一步進む1年になることを期待しましょう。

さて、今日は2つの話を紹介したいと思います。

いずれも、20代の頃に出会い、ずっと心に残ってることです。

一つ目は、アジア保健研修所（通称AHI）の創立者の川原啓美（かわはらひろみ）先生が体験されたことです。教員になったばかりの頃先生ご自身の講演で知り、数年前に先生の著書「ひとすじの道」で再会しました。先生は医療協力のため、1976年に3カ月ほどネパールに派遣されました。そのとき出合った26歳の女性患者、マヤデビさんに大きな衝撃を受け、人生が変わります。「ひとすじの道」（ライフ企画）から引用します。「人生を変える出会い」という章です。

“下肢の腫瘍と聞いていた私は、早速、患部を見て、思わず息を呑んだ。彼女の右膝のすぐ下に、直径七センチほどの腫瘍があり、一部は崩れて少量の血液が滴っている。

「いつからこんな状態になったのですか」という私の問いに、彼女の説明はこうだった。

二年ほど前、ふとしたことでその部分にけがをしてしまった。その傷は化膿してなかなか治らず、そのうち潰瘍になって、次第に大きくなってきた。一部から出血するようになり、止まらない。何とかしてほしいと思い、二日かかりで病院に来た。

その腫瘍はひと目で、非常に進行した皮膚がんと思われた。とりあえず行ったテストで、彼女の血液中のヘモグロビンは、正常の人の四分の一しかなかった。これでよく歩けたものである。(略)

私は彼女に、「あなたの右の下肢は切断しなければなりません」と告げた。

ところがそれを聞いた彼女は、

「それは困ります。私の子どもたちは、まだ小さく、私の代わりに谷への水汲みとか、畑仕事はできません。ですから私には、どうしても二本の足が必要なのです」と強く主張した。

これはもう、真実を告げるほかはない。「今あなたの足を切断しなければ、この部分にはまた同じような病気が再発します。体の他の部分にもできるかもしれません。そしてあなたは命を失うことになるのです。助かるためには足を切断しなければなりません」

彼女はさすがに沈黙して、下を向いた。しかし、しばらくして顔を上げた時、彼女はこう言ったのである。

「私が死ぬのは悲しいことです。でも、仕方のないことです。というのは、もし私が死ねば、私の夫は次の妻をもらうことができます。そしてその健康な新しい妻は、私の子どもたちを育て、夫を助けて働くことができます。しかし、もし私が足を切られ、何もすることができなくなったらどうなるでしょう。貧しいわが家は、全滅するかもしれません。私にはそんなことはできません」

耳を疑うとは、こういうことだろうか。外科医になって二十五年、初めて聞く言葉であった。最初は通訳の誤りかとも思ったが、そうではない。(略) 私は返す言葉を失って、彼女のベッドの傍らに、呆然と立ち尽くしていた。“

<結局彼女は患部を切除するのみの手術を受けます>

“彼女の希望は、「また歩けるようになりたい。たとえ命を縮めることになっても、死ぬまで家族のために働きたい」ということであった。(略)

彼女は生死にかかる一大事に際し、愛する家族の幸せを自らの生命よりも優先するという驚くべき決定をしたのである。およそ、愛する人のために自分の命を捨てても構わないというほど素晴らしい愛が、此の世に存在するだろうか。そして、残念ながらおそらく、私はそのような愛を実践できない。

この、一見平凡な若い女性が、私より遙かに優れた人間であるという発見が、私に大きなショッ

クを与えたのである。”

川原先生は、こういった人達のために自分ができることは何かと真剣に考え、それが公益財団法人「アジア保健研修所」の設立につながります。

講演を聞いた当時に 20 代だった私も、マヤデビさんの「無私」の心にびっくりしました。同時に「心のありよう」として自分自身もこうありたい、と感想を持ったことが思い出されます。

二つ目はベートーヴェンの交響曲第 9 番「第九」についての思い出です。今年はベートーヴェン生誕 250 周年です。日本では年末の風物詩で好きな人もいると思いますが、今はコロナ禍で中止となったり、少人数でマスク着用しての演奏だったり、と例年通りにはいかないようです。

大学時代にフルトベングラー指揮の 1951 年パイロイト音楽祭における「第九」に出会い、はまりました。

“第 4 楽章は、4 人の独唱者と大合唱を加えた偉大な終曲である。

はじめにプレスト（はなはだ速く）二短調、4 分の 3 拍子—管楽器だけで激しい律動的な調べが起る。つづいてチェロとコントラバスが無伴奏で抒情的な旋律を出す。前者は問であり後者は答えであるかのようだ。問は激しい響きで「歓喜」をあらわそうとする。答えはそれを否定する。この対話が繰り返され、やがて第 1 楽章のはじめの部分が出てくる。その旋律は力を示し奮闘を示すもののようであった。しかしそれはまたチェロとコントラバスの叙唱旋律によって否定される。次いで第 2 楽章のはじめが現れる。これは熱狂的な乱舞であった。これもすぐ叙唱旋律が出てきて止める。次には第 3 楽章の中心主題が出る。優しい調べ。愛と憧憬—しかしこれもたちまち否定されてしまう。「歓喜」は奮闘でもなく、熱狂でもなく、愛でもない。……”

（「ベートーヴェン交響曲第九番『合唱付』音楽之友社 III より）

曲は進み、合唱の旋律の動機が木管で現れます。チェロとコントラバスは否定せず、有名な歓喜の旋律（#ファ—ソ—ラ—ラ—ソ—#ファミ—レーミ—#ファ—#ファ—ミレ…）がチェロとコントラバスの演奏で静かに始まります。この主題は変奏を重ね、次第に厚みと色彩を加えていきます。

そして、再びプレストで激しい全合奏があり、今度は独唱バリトンの叙唱で払拭されます。ベートーヴェン自身による「おお、友よ、このような音ではなく、わたしたちはもっと心持のよい、もっとよるこびにみちたものを歌いだそうではないか。」です。それからシラーの歓喜に寄せる頌歌（しょうか）が歌われていきます

“（ベートーヴェンは）つまり歓喜というものは、第 1 楽章のような闘争でも努力でもなく、第 2 楽章のような熱狂でも第 3 楽章のような安静でもない。もちろん、そういう要素も必要だが、(略)、歓喜の旋律はこのように誰にでも親しまれる簡明素朴のものでなければならないというのである。”

（松蔭高校図書館蔵「作曲家別名曲解説ライブラリー③ベートーヴェン」音楽之友社 73 頁）

出典が不明で記憶も不正確ですが、大学時代に読んだ別の解説書には、“ベートーヴェンは第 3 楽章はためらいながら、そして振り切るように否定する”とありました。確かにそのように聞こえます。実際のところベートーヴェンがどう考えたかは不明ですが、こういった「蘊蓄」を楽しみながら聴くことは「第九」の楽しみ方の一つだと思っています。

「……無限の霊を持っている私たち有限の人間どもはひたすら悩んだり喜んだりするために生まれていますが、ほとんどこう言えるでしょう—最もすぐれた人々は苦悩をつき抜けて歓喜を獲得するのだと……」（松蔭高校図書館蔵ロマン・ロラン著「ベートーヴェンの生涯」岩波文庫 94 頁）

「第九」に込められた「苦悩を突き抜け歓喜に至れ」という思いは、今年の年末こそに聴きたいものです。興味を持った人は、是非聴いてみてください。

長い 2 学期が、今年はいつもとよりさらに 1 週間長くなりました。

3 年生の皆さんの進路希望が実現すること、そして、1 年、2 年、3 年生の皆さんと 1 月 5 日に元気な姿で会えることを祈り、式辞とします。